



「人生は敗者復活戦」

「人生は敗者復活戦」。この夏に行われた第一〇五回全国高校野球選手権記念大会で準優勝した、仙台育英学園高等学校の須江監督のインタビューの言葉です。ネットでも「名言すぎる」と話題になった言葉であるため、ご存知の方も多いと思います。別のインタビューではこんなこともお話しされていました。「成功から学べることも多いが多きは失敗や負けたことから学べることが多い」と。

私が高校野球に関心を持つようになったのは中学二年生の春休みです。ショッピングモールの中に設置されていたテレビ画面越しに、選抜高等学校野球大会の様子をたまたま目にしました。そこには沖縄県代表として大舞台で必死にプレーしている選手の姿が映っていました。その姿に非常に感動し、自分よりたった二つ、三つくらい年上の先輩たちがこんなに頑張っているのだと感じたことを今でも鮮明に記憶しています。そして、誰かの頑張っている姿を見ると人はこんなに感化されるものだと思ひ、心の中がふんわりと温かくなるのを感じたものです。

私の出身地である沖縄県では、バスケットボールも根強い人気があります。私の友人や親戚もバスケットボールに関わっている人が多くいました。小学生の頃からミニバスケットボール部に所属していたり、家にバスケットボールのリングを設置していつでも練習をしたり遊んだりすることができ

きるところがあったりと、バスケットボールというスポーツを身近に感じられることが多々ありました。そのため私もバスケットボール部に所属していました。そんな私でしたが冒頭にも触れたように高校野球に関心を寄せるようになったのは、あの偶然目にした試合の中継がきっかけです。そして、誰かのひたむきに頑張る姿は他の誰かを前向きな気持ちにさせることがあるのだと学んだ出来事でもあります。当時は約一年後に高校受験を控えていたことや、沖縄の中学校から東京の高校を受験することが決まっていたため不安もあったものの、頑張っていかなければという思いにさせられました。

時に悩んだり苦しんだりしたこともありますが、それでもやり抜くことができたのは、とにかく動き続けることを心がけたからだと思います。それができたのは、やはり周りの人のサポートもあつたことだったと当時を振り返り感謝しています。それは恩師の存在であったり、幼稚園の頃からほぼ一緒にいるクラスの仲間だったり、毎日食事を作ってくれた祖母や母であったり。行き詰っていたときには、海の波の音を聞くとよいと先生からアドバイスを受け、近くの海に足を運び波の音を聞いて心を落ち着かせて気持ちを切り替えるように努めたこともあります。



何かに向かって努力をするとき、全てが順風満帆にいくことはめったにありません。しかし困難にぶつかったとき、そこから何か学び得ようとする視座を持っているかどうかで、後の自分に返ってくるものが変わってきます。須江監督の言葉にもあつたように、失敗や負けたことから学べることも多いということは本当にそうなのだと思います。最後に、最近出会った本の中の言葉を紹介します。「何も打つ手がないとき、一つだけ打つ手がある。勇気を持つことだ。」ユダヤのことわざです。ほんの少しでも良いので勇気を持つてみる。勇気を持つということは、考え方を少し変えてみるということも含むようです。

あなたのひたむきに頑張る姿が、他の誰かの頑張りたいと思うきっかけとなるそんな思わぬ副産物も生まれるかもしれません。(比嘉)

国語における

文章読解について

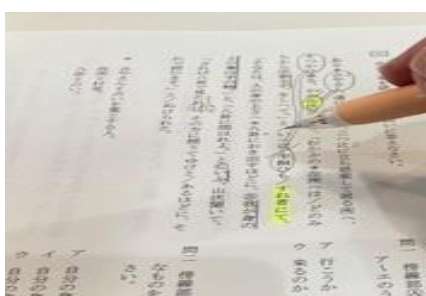
長かった夏休みも終わり、もうすでに二学期がスタートしています。中学校によっては、もう中間テスト直前です。テスト勉強、頑張っていますか？

さて、今回は国語における文章読解力を向上させるためにどうすれば良いのか、という話をします。ただし、国語が得意な人は今までの勉強のやり方を無理やり変える必要はありません。あくまで苦手としている生徒を対象に話を進めていきます。

【一】文章内容を理解するために、文章中に作業をしましょう

「作業をすること」とはどういうことかわかりますか。これは、「文章中に印をつけたり、線を引いたりすること」です。このような作業をしたことはありませんか。また、このような作業をしている人を見たことはありませんか。なぜ、このようなことをすると思いますか。それは、大事な部分だから、後から読むときに見やすくするため、わかりやすくするためです。

文章内容を理解するためにまず行うことは、文章を読みながら作業することです。線が引かれた部分をつないでいけば、大まかな内容をとらえることができ、文章内容が理解しやすくなります。



ここで問題となってくるのは、どこに印をつけたり線を引いたりすればよいのか、という事です。中学一年〜三年には一学期の国語の授業を通して、「文章読解テキスト《前編》」を配布しています。そこに記載されているので、ぜひ参考にしてください。

【二】問題を解いた後の取り組み方で大きな差が生まれます

以前、生徒のノートチェックをしているとき、非常にショックな出来事がありました。その生徒のノートは丁寧に使われていて、一見、とくに問題なさそうに見えました。丁寧に〇×が付けられ、模範解答は余白部分に丁寧

に赤ペンで書かれていました。そのとき気軽に私は生徒にこんな質問をしました。「この書き抜き問題を間違えたんだね。模範解答はこれだけれど、これは文章中のどこにあった？」すると、生徒は「わかりません。」と即答してきました。その後よく話してみると、今まで、問題を解いて答え合わせをしたら、それで終わりだったそうです。模範解答をノートに書くが、それがどこに書いてあったのか確かめることもなかったそうです。

どの教科でもそうですが、ワークなどに取り組むのは現在の自分自身の力をはかるためです。そして、そこから自分自身をレベルアップさせるためには、間違えた後、なぜ間違えたのか、なぜ模範解答はこうなっているのかということをとことんまで追求する必要があります。問題を解いて、答え合わせをするだけで満足しないでください。成績を伸ばす生徒は答え合わせをした後の過ごし方を重視しています。

【三】解き直しをしまじょう

最後は当然「解き直し」です。解き直しを指示されても「所々答えを覚えているから」「内容を覚えているから」といった理由でやらない生徒が少なからずいます。これはとても残念なことです。東大合格者は、模試も過去問も三回解き直すと言います。解き直しにはそれぐらいの価値があるのです。解き直しは「ある程度内容や答えを覚えていてる状態で、解き方・考え方を思い出しながらまねる作業」のことで、学力向上のために非常に重要な作業です。これから出会う全ての問題で実行してください。本気で伸びたいと思うのなら、必ず実行してください。

未来を見るな、未来を変えろ

(村田)

模範試験の正しい活用法

「未来を見るな、未来を変えろ!」。S・キング原作、D・クロウネンバーグ監督作品『デッド・ゾーン』のキャッチコピーである。交通事故で他人に触れるとその人の未来を予知する力を得た主人公。教え子のアイスホッケー中の事故死のビジョンを見て試合参加を止めさせ運命を変えたことから、彼は未来が変えられることに気づく。ストーリーは最後、世界の破滅を防ぐための決死の行動で終わるのだが、それはさておき、このコピーは模範試験の活用について考える際、最も大切なことを示していると思う。

模試の偏差値や判定結果に「未来を見よう」とするのは間違いである。判定がよかった場合、受かった気になって勉強をおろそかにし、その結果成績下降に至るといいうのも間抜けな話だが、他方で判定が悪かったからといって悲観して志望校をすぐ下げてしまうのも馬鹿げている。模試が映し出しているのは、未来の自分の姿ではなく、現在の自分の実力である(厳密に言えば、模試を受けたときだから「過去の」と言った方がよい)。志望校に受かるために必要な成績と現状とのギャップを測定し、その溝を埋めるためにどの単元に力を入れればいいのか、「未来を変える」ために使うのが本来の活用法である。

受験生はこの時期、夏以降に受けた最初の模試の結果を受け取る頃かと思う。一日十時間以上、これまでの人生でこんなに勉強したことはない、さぞやいい結果が待っているに違いないと期待し

た人が多いと思うが、偏差値十以上アップと急上昇する人がいる一方、多くの人は夏前とたいして変わらない結果に愕然としているのではないだろうか。

その理由は主に二つ。一つは勉強した結果が成績に反映するにはタイムラグがあること。特に英数国の三科は、知識量が増えても演習を繰り返さないと血肉にならないため、結果が出てくるのは二、三カ月後になることが多い。もう一つは、夏に頑張ったのはあなただけではないということである。おそらく周囲の受験生もみな同じぐらい机に向かっていたはずだ。偏差値というのはテストを受けた集団の中での位置関係を示すものなので、全体の学力が上がれば、その平均を上回る学力アップを図らない限り成績は変わらない。

では、偏差値十以上上がった人は何が違うのか。最も大きいのは、ボトルネックとなっていた苦手教科、苦手単元を克服したことである。ボトルネックというのは「瓶(ボトル)の首(ネック)」、すなわち容器の最も細くなっている部分を指す言葉である。液体を注ぐ際、他の部分の幅をいかに広げても、最も細い首の部分で流量は決まってしまう。道路の渋滞から生物進化、化学反応、プログラミングなど、あらゆる問題の解決には、その最大要因となるボトルネックの解消が先決であり、他をいじっても問題は解決しない。



高校入試を例にとると、問題が難しく平均点が低い私立高校入試では図抜けた得意科目があれば一点突破も可能だが、五科のバランスが問われる公立高校入試の場合、各自の一番苦手な科目がどれぐらい取れるかで行ける高校が決まってしまうケースが多い。長時間勉強時間が取れる夏休みを有効利用して、これまで全然出来なかった苦手単元をマスターし、一気に得点アップをはかれた人は大きく成績を上げ、得意科目に時間を割いてしまった人は停滞ないし成績低下に陥ったという状況だ。

特に理社を苦手としていた人が『マイクリア』をどんどん進めた場合、即効性のある科目だけにすぐに効果が出たということはあるだろう。となると、すぐに結果が欲しい人は理社ばかりやりかねないので警告しておく、理社を終えてから三科にとりかかると、結果が出てくるのに時間がかかるから入試に間に合わなくなる危険性がある。やはりバランスを考えて進めないと、公立入試はうまくいかないのである。

受験生には秋以降、毎月複数回の模試が待っている。よく模試の直前に範囲を確認している生徒がいるが、秋以降は出題範囲も広がるし、模試のたびにその範囲を勉強している暇ははつきり言っていない。模試は事前に勉強して臨むのではなく、終えて成績が出てから、苦手単元を抽出するのに使うべきである。時間配分について再考し、自分の犯しやすいミスを自覚し、取るべき問題と捨てるべき問題を峻別することも大事である。そうすれば入試本番の得点を、模試の段階から引き上げることができる。

もう一度言おう、受験生諸君「未来を見るな、未来を変える!」

(片岡)